

不同意の発話行為における中間言語語用論

日本人英語学習者の場合

服部 幹雄

Interlanguage Pragmatics in Utterances of Disagreement

- The Case of Japanese Learners of English -

Mikio HATTORI

1. はじめに

相手の述べた情報内容を訂正したり、相手の意見に反対を表明することは日常会話において頻繁に行なわれているが、比較的直截的な話し方をすると言われる英語母語話者が英語でコミュニケーションを図る場合であっても不同意の表明は相当に負担の重い発話行為であると言える。Hattori(in press)が指摘しているように、不同意が本質的に非礼な相手の面子を脅かす発話行為(face threatening act、以下FTA)であるゆえ、相手の面子に配慮した適切なストラテジーを使用する必要があることに加え、なわ張り関係²を適切に発話に反映することも要求されるからである。当然のことながら、英語を母語とせず、他人との対立をできるだけ避けようとする国民性を持つ日本人が英語でコミュニケーションを図る場合、不同意はその産出にもっとも困難を伴う発話行為の1つであると言えるであろう。ただし、Hattori(in press)が示すように、話し手が置かれているなわ張り関係によって困難度は相当異なる。型Cの状況下では、話し手が聞き手の独占している情報を表現することになり、聞き手のなわ張りを脅かさないう十分な配慮が求められるため、話し手の負担は重い。一方、型Aの状況下では、そのような配慮は必要なく、負担はかなり軽減される。ここでは話し手が独占している情報を表現するわけであるから、聞き手のなわ張りを犯したり、情報の独占化に由来する好ましくない印象を与えたりする恐れがないからである。

本稿では、困難度では中程度と見られる型Dの状況下における日本人英語学習者の不同意の応答を英語母語話者の振る舞いと比較しつつ分析し、不同意表現の特徴を明らかにするとともに、日本人英語学習者が語用論的能力を向上させていく過程で構築する中間言語の一端を探ってみたい。³

2. 不同意の応答ストラテジー

型Dの状況は $n>S$ H、すなわち情報が話し手、聞き手双方のなわ張り外にある状況である。ここでは話し手は間接形を用いて訂正情報、反対意見の表明を行なうことが予想される。話し手は自分のなわ張り内にはない情報を表現するわけであるから、情報が話し手のなわ張りに深く入る($S=1$)ことを示唆する直接形、NYNQ形を使用すれば、明らかに差し出がましい印象を与える恐れがある。DTQ形は情報が多少なりとも話し手のなわ張りに入っていることを示唆することから、直接形、NYNQ形ほどではないにしても、やはり僭越な印象を与える可能性が

ある。しかし、DTQ形は情報が話し手より聞き手のなわ張りに深く入っていることを示唆する面も併せ持っている。意図的に話し手よりも聞き手の情報量が多いように振る舞うことで丁寧さを表すストラテジーとして使用される可能性もある。話し手がどの文形を使うにせよ、型Dの状況下では、話し手が表現する情報は聞き手のなわ張り内にもないわけであるから、少なくとも話し手が聞き手のなわ張りを犯す心配はない。

以下、英語母語話者の振る舞いを最初に検討し、それと比較しながら日本人英語学習者の振る舞いを考察していく。以下の会話例においては、不同意の応答を行なう者を話し手とする。つまり、不同意の応答を行なう者の立場から見て型Dのなわ張り関係が成立していることになる。⁴

2 - 1 英語母語話者の場合

(1) X : I think it's called SHIRASAGIJO.

Y : I don't know for sure. I heard another name before, but I can't be certain.

(1)は、XとYが旅行のパンフレットを見ながら話し合っている会話の一部である。Xが写真に写っている城の写真について発言し、それに対してYが不同意を表明している。X、Yともに来日して日が浅く日本の事情には疎いため、日本に関する地理的情報は両者のなわ張り外にある。

(2) X : I think the Kiso is a pretty long river. It's probably a longest one.

Y : Hmm. I don't know much about Japanese geography, but I thought the Kiso was pretty small. Are you sure?

(2)は(1)のしばらく後に同じ参加者によって交わされた会話である。Xが日本の川について発言し、それに対してYが不同意を表明している。(1)の場合と同様に、日本に関する地理的情報はX、Y双方のなわ張り外にある。

(3) X : Ed seems to be very lenient.

Y : Well, he may seem THAT way, but I think he's very strict.

(3)では、Xが知り合いの教師Edの性格について発言し、それに対してYが不同意を表明している。EdはX、Yにとって知り合って日の浅い知人に過ぎないため、Edについての情報は両者のなわ張り外にある。

型Dの状況における英語母語話者による不同意の応答は、型Cの状況における応答と基本的には類似している。すなわち、訂正情報、反対意見の表明はすべての事例で間接形またはDTQ形が用いられている。たとえば、(2)ではI thought、(3)ではI thinkがそれぞれ間接形を構成する要素である。ただし、DTQ形の出現頻度は全事例の約1割に留まる。訂正情報、反対意見の表明はさまざまな要素によって先送りされる傾向にあった。言うまでもなく、訂正情報や反対意見の表明をなるべく遅らせ、目立たなくさせるためである。(2)では訂正情報の表明、(3)では反対意見の表明がそれぞれ先送りされている。

しかし、注意深く観察すると、型Cの状況とは細部において重要な相違が見出される。まず、

事実に対する不同意の応答では、発言冒頭のポーズ(filled pauseを含む) 情報内容の確認、談話辞の出現頻度が低くなっている。発言冒頭で訂正情報の表明が現れる事例も約3割に達している。訂正情報の表明に先行する要素として目立つのは、(1)、(2)のI don't knowなど話し手が聞き手の表明した事実に十分知悉していないことを表す表現である。

意見に対する応答においては、やや慎重な態度がうかがえる。それでも型Cの状況と比べると相当簡略な応答となっていると言える。反対意見の表明に先行して、(3)に見られるwellなどの談話辞、情報内容の確認、ポーズが生じしやすくなるが、これらの要素のいずれか1つが使用される事例が大半で、型Cの場合に見られた2つ以上の要素が組み合わされて出現する事例は少ない。また、型Cの場合には談話辞、情報内容の確認、ポーズのいずれかがほぼ全事例で出現していたが、型Dの場合は全事例の約7割に観察されるに過ぎない。反対意見に先行する要素として型Cの場合には見られなかったI don't knowも使用される。積極的丁寧さ(positive politeness)のストラテジーはまったく見られなかった。(3)で見られる見かけだけの同意は約1割の事例で観察されるに留まる。反対意見の表明だけが単独で現れる事例も散見される。反対意見の表明が部分的(条件付)反対になっている事例は少ないながらも見出されるが、これは反対意見の表明だけが単独で現れる事例に多く見られた。

型Cの状況下と比較して型Dの状況で応答が簡略になっているのは、聞き手のなわ張りを犯す危険性がないからであろう。その一方で、訂正情報や反対意見の表明が先送りされるなど型Cの状況で用いられるストラテジーとの類似も見られる。これは、話し手が訂正情報や反対意見の表明で間接形を使用したとしても、それだけではFTAの遂行に伴う非礼な印象や自分のなわ張りにならない情報を表現することに起因する僭越な印象は回避できないとの判断が働いていると見られる。特に、発言冒頭に頻出するI don't knowは自己のなわ張りに属さない情報を表明する話し手の立場を反映するものとして興味深い。この表現によって、話し手は評価、判断の権威を有していないことを表明し、続く訂正情報や反対意見の表明から生じ得る非礼さを軽減しようとするのである。

2 - 2 日本人英語学習者の場合

(4) X : I think this bus goes to Aratamabashi.

Y : I think this bus doesn't go to, er, Aratamabashi. # I'm not sure. You should ask bus driver.

(4)は、XとYがバスの路線図を見ながら話し合っている会話の一部である。Xがあるバス路線の通過停留所について発言し、それに対してYが不同意を表明している。X、Y共にバスはほとんど利用しないため、バスの運行状況に関する情報は両者のなわ張り外にある。

(5) X : Sachie doesn't seem to enjoy her part-time job.

Y : Really? I heard Sachie is # enjoying.

(5)は、XとYが共通の知人であるSachieについて話し合っている会話の一部である。XがSachieの最近の様子について発言し、それに対してYが不同意を表明している。X、YにとってSachieは単なる知人に過ぎず、その私生活まで知り得る立場にないため、Sachieの個人的情報は両者のなわ張り外にある。

- (6) X : Teruko seems to like Japanese furnishings.
Y : No, she seems to like # America, er, interior.

(6)は、XとYが共通の知人であるTerukoについて話し合っている会話の一部である。XがTerukoの好みについて発言し、それに対してYが不同意を表明している。X、YにとってTerukoは単なる仕事上の知人に過ぎず、その個人的趣味まで知り得る立場にないため、Terukoの個人的情報は両者のなわ張り外にある。

日本人英語学習者による応答は、反対意見、訂正情報の表明に使用される文形の点では英語母語話者の応答に類似している。すなわち、すべての事例で間接形またはDTQ形が使用されている。たとえば、(4)ではI think、(5)ではI heard、(6)ではseemsが間接形を構成する要素である。しかし、英語母語話者による応答と比較するとやや簡略なものになっているのが特徴である。また、事実に対する応答と意見に対する応答の間に顕著な相違が見られないことも注目される。反対意見、訂正情報の表明は、発言の冒頭が冒頭に近い部分で生起することが多い。反対意見、訂正情報の表明が先送りされる場合、それらに先行する要素はreally?など情報内容の確認が大半を占め、談話辞の使用はほとんど見られなかった。ポーズは頻出しているが、生起頻度が特に高い個所を特定することはできず、必要な表現を探すための時間稼ぎとして使われていると推定される。

英語母語話者の場合と同様、(4)で見られるI'm not sureなど自己のなわ張りに属さない情報を表明する立場を反映する発言も現れる。ただし、日本人英語学習者の場合、これらの発言が反対意見、訂正情報の表明の前だけでなく後にも生起しているのが特徴である。英語母語話者の不同意の応答においては、大半の事例で緩和要素が反対意見、訂正情報の表明に先行している。これは、緩和要素の先行によって聞き手に反対意見、訂正情報の表明が後に続くことを予想させ、聞き手が不同意を話し手の挑戦や敵意の表れと解釈することを防ぐためであろう。会話の参加者間に一旦敵意が生じれば、それを回復することは非常に難しい。緩和要素の先行は、あらかじめ予防線を張り、聞き手に心の準備をさせる重要な役割を担っているのである。語用論的能力が十分発達していない日本人英語学習者の場合、そこまでの配慮を行なうことは難しいということであろう。

(6)に見られるnoなど事実、意見の相違をあえて際立たせる表現が発言冒頭に現われるのも日本人英語学習者による応答の顕著な特徴として挙げられる。その使用が英語母語話者によって避けられるのは、話し手が聞き手の評価、判断の権威を認めていない事実がことさら強調されてしまうからであろう。

出現頻度はあまり高くないが、I'm sorry、Sorryなど謝罪表現による消極的丁寧さ(negative politeness)のストラテジーが発言冒頭に現われるのも日本人英語学習者だけに見られる現象である。この謝罪表現においては、聞き手に対して不同意を表明しなければならないことに対する遺憾の意が意図されていることが多いが、表明しようとしている情報が不確実であることに対する謝罪が意図されている場合もある。

3 結 論

型Dの状況下における不同意の応答は、英語母語話者、日本人英語学習者いずれの場合も、型Cの状況下の応答よりは簡略であるが、型Aの状況下の応答よりは手の込んだものになっていることがわかる。英語母語話者と日本人英語学習者の振る舞いを比較すると、後者の応答が

全般に直截的なものになる傾向が見られる。日本人英語学習者の際立った特徴として、訂正情報、反対意見の表明を緩和するストラテジーの使用頻度が低いこと、それを具現化する表現も少数の定型表現に限られていることが挙げられる。なわ張り関係や先行発話が事実、意見いずれの表明であるかに応じて緩和表現を使い分けることにも十分習熟できておらず、緩和表現を出すタイミングについても英語母語話者並みの配慮を行なうまでに至っていない。その一方で、日本人英語学習者はなわ張り関係を認知し、それを適切な文形に反映させていることが重要である。さらに、消極的丁寧さに代表される独自の緩和ストラテジーを使用するなど中間言語を発達させていく側面が観察されることはまことに興味深い。

注

1. Brown and Levinson(1987)のpoliteness理論によれば、人間は面子を傷つけられたくない、人に認められたいという2種類の欲求を持ち、FTAを互いに避けようとする。前者の欲求が消極的面子(negative face)であり、これに配慮してFTAを緩和しようとするのが消極的丁寧さ(negative politeness)である。後者の欲求が積極的面子(positive face)であり、これに配慮を示すのが積極的丁寧さである。
2. 神尾(1990, 1998, 2002)が提唱している情報のなわ張り理論における用語。神尾(2002)では、話し手、聞き手と情報との心理的距離(なわ張り関係)に応じてA、B、BC、CB、C、Dの6つの型が設定されている。型Aは情報が話し手のなわ張りに深く入るが、聞き手のなわ張りには属さない状況である。用いられる文形は単純な言い切りの形である直接形である。型Bは情報が話し手、聞き手双方のなわ張りに属する場合である。用いられる文形は型Aの場合と同じ直接形である。型BCは情報が話し手、聞き手双方のなわ張りに属してはいるが、聞き手よりは話し手のなわ張りにより深く入っている状況である。用いられる文形は否定疑問文の形を取るNYNQ形(Negative Yes-No Question)である。型CBは情報が話し手、聞き手双方のなわ張りに属してはいるが、話し手よりは聞き手のなわ張りにより深く入っている場合である。用いられる文形は付加疑問を伴うDTQ形(Declarative with a Tag Question)あるいはNYNQ形である。型Cは情報が聞き手のなわ張りに深く入るが、話し手のなわ張りには属さない状況である。用いられる文形は発言を不明確にしたり緩和したりする要素(seem, perhaps, I hear等)を含む間接形である。型Dは情報が話し手、聞き手双方のなわ張り外にある状況である。用いられる文形は型Cの場合と同じ間接形である。
3. データはHattori(in press)のために収集したものを使用した。これは英語母語話者同士あるいは英語母語話者と英検2級合格程度の英語力を持つ日本人英語学習者が自然に交わっている会話を収集したものである。ここから、型Dのなわ張り関係が成立している14名(英語母語話者8名、日本人英語学習者6名)の「陳述 - 不同意」の隣接対句を抽出し、不同意の応答の特徴を調査した。
4. 以下の会話データ中の固有名詞は地名を除き仮名にした。会話データ中の記号の意味は次の通りである。
 .(ピリオド)下降の音調が認められ、文と認められる発話の終わる個所
 ? 疑問表現の上昇の音調が認められる個所
 # 発話中はっきり認められるサイレントポーズ

引用文献

- Brown, P. & S. Levinson(1987) *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hattori, M (服部幹雄)(in press)「日本人英語学習者にみられる『不同意』の応答ストラテジー」『篠田義明教授古稀記念論文集(仮称)』東京: 南雲堂.
- Kamio, A (神尾昭雄)(1990)『情報のなわ張り理論』東京: 大修館書店.
- Kamio, A. & K. Takami (神尾昭雄・高見健一)(1998)『談話と情報構造』東京: 研究社出版.

Kamio, A (神尾昭雄)(2002)『続・情報のなわ張り理論』東京：大修館書店。